

# スペイン内戦下における共和国陣営のポスタープロパガンダ

——国民統合の手段としての観点から——

佐藤 庸介

はじめに

1. 共和国政府における戦時体制構築と国民統合
2. ポスタープロパガンダの生産と美的様式
3. ポスタープロパガンダの役割

おわりに

はじめに

1936年7月に始まったスペイン内戦によって、スペイン国内は共和国政府とフランコ率いる反乱軍という二つの勢力に二分された。さらに内戦の持つ民主主義、ファシズム、共産主義といったイデオロギー的性質は国際的に大きな反響を巻き起こし、共和国政府は主にソ連、反乱軍側はドイツやイタリアといったナチズム、ファシズム国家の支援を受け、また各国から多数の国際義勇軍が民主主義防衛の大志を抱き参加した。

スペイン内戦はドイツやイタリアなどの外国勢力にとって、近い将来の世界大戦に向けた軍事兵器や戦術、兵員訓練といった軍事面での格好の実験場であるとともに、プロパガンダと情報の分野においても第二次世界大戦の先例となった。プロパガンダ戦略は史上初の総力戦となった第一次世界大戦において、銃後の大衆動員という戦争の趨勢に決定的な役割を果たした。そしてスペイン内戦においては、その複雑なイデオロギー的性格によって、より重要な戦略となる<sup>1</sup>。内戦に使用されたプロパガンダのメディアには、第一次世界大戦から受け継がれたポスター、ビラ、新聞や雑誌といった活字出版などに加え、新たにニュース形式の有声映画とラジオが登場した。この二つは第二次世界大戦において主役メディアとなるわけだが、スペイン内戦においても積極的に利用された。こうした様々なメディアは、前線の士気の維持、銃後の大衆動員、敵への脅迫、誤情報の流布、国際世論へ向けた自陣の正当性の主張など、多様な目的を持ったプロパガンダの媒体に変化し、共和国、反乱軍両陣営にとって強力な武器となったのである。

スペイン内戦史における戦時文化、プロパガンダの研究は、1975年のフランコの死による独裁終焉、つづく民主化の過程によって研究者の自由が保障され、史料公開が進んだことにより活発になった。80年代にはエスコラルやソリアによって戦時文化や教育の包括的研究がなされ<sup>2</sup>、ラジオや映画、ポスターなどのメディアが戦時文化の一要素として、そしてプロパガンダの側面からも分析されるようになった。80年代後半から90年代は各メディアの個別研究が進み、ラジオ、映画、ポスター、写真、新聞や雑誌などの活字媒体、演劇、詩、文学、見世物など多岐にわたる研究が、主にスペイン人研究者の手で蓄積された<sup>3</sup>。特に、有声映画とラジオは、プロパガンダとして強力な機能を持つこと、後の第二次世界大戦の先例となったことなどから、最も個別研究が進んでいるメディアである。また近年ではよりミクロな地域別の研究も盛んである。しかし、ラジオや映画を中心に個別史としての研究は進むものの、それらを比較し、統合した全体的なプロパガンダ研究はいまだ未開拓であり、これからの課題である。

内戦の政治ポスター研究も他のプロパガンダ研究と同様、フランコ死後に本格化する。中でもグリマウは、共和国側のポスターについて、前史、美的様式、イメージやレトリックの分析、さらにそのイデオロギー的、政策的、社会的背景の考察、様々な製作・発行機関、ポスターデザイナーの紹介など、多面的かつ総合的な研究を行い、ポスター研究の礎を築いた<sup>4</sup>。また、内戦中ポスターデザイナーとして多くの作品を残したフォンセレは、自身の経験からバルセロナのポスターデザイナー組合(SDP: *Sindicat de Dibujants Professionals*)の活動を解説した<sup>5</sup>。一方、エスコラルは戦時教育の宣伝という観点から共和国のポスターを分析するなど、個別のテーマに即した研究も行われた。またトマスは、フォトモンタージュや諷刺絵の構造分析や、イメージやレトリックによる「男らしさ」や「善と悪」の暗喩、女性像などの緻密な図像分析を行い、美学的アプローチから内戦ポスターを研究した<sup>6</sup>。70年代後半から80年代にかけてはこうした様々なアプローチから、共和国側を中心に内戦ポスターの研究が進められた。共和国側ポスターの数と種類はフランコ側ポスターよりも圧倒的に多く、またその美術様式、イデオロギー性やテーマの多元性は様々な角度から分析を可能にしたのである<sup>7</sup>。

しかし90年代に入ると、カルリヤの包括的な研究を除けば<sup>8</sup>、内戦ポスターを扱った研究はほとんど現れなくなる。ラジオや映画を中心とした現在のプロパガンダ研究の中では、最も研究が遅れているメディアの一つといえよう。確かにポスターはラジオや活字出版に比べると、戦争の状況を即座に伝え、それに見合った最善の策を適宜宣伝するという即時性の点では劣っている<sup>9</sup>。しかし当時のスペイン人口の45パーセントという文盲率を考慮すれば<sup>10</sup>、視覚メディアの重要性は明らかである。それゆえポスターはプロパガンダ研究において非常に重要な位置を占めるといえる。また、内戦期のポスターは大量に残存、保管されている<sup>11</sup>。こうしたプロパガンダとしての重要性、史料の入手しやすさを考慮すれば、アプローチの仕方次第でまだまだ研究の余地があるメディアである。

従来のポスター研究では、ポスタープロパガンダは「特定」の対象の意識を、「特定」の目的に向かわせるために使用された、という視点から分析する傾向が強かった<sup>12</sup>。しかし「規律を守れ」「増産せよ」といったスローガンの反復は、確かに対象の心理に影響を与えるだろうが、「なんのために規律を守らねばならないのか」「なぜ増産する必要があるのか」といった根本的な動機を満たさない限り、こうした特定のスローガンは単なる強制力にすぎなくなり、最大限の効果を発揮できないのではなかろうか。この根本的な動機とはすなわち特定の階級や職業を超えて共通する意識であり、そうした共通意識、連帯意識の形成によって人々は政府の大衆動員政策に同意する。そしてポスターは、具体的な動員を実現するためのプロパガンダであると同時に、こうした共通意識、連帯意識を形成するためのプロパガンダとしても用いられたはずである。従来の研究ではこうした根本的な共通意識、連帯意識の分析がほとんどなされてこなかったのである。

本稿では特に「国民意識」の形成とポスタープロパガンダの役割について注目する。後述するが、スペインの歴史的な不均等発展の結果、共和国は利害を異にする様々な社会集団を内包していた。こうした様々な階級・職業間の利害対立を融和させ、戦争遂行のために結束させるには、同じ共和国を支持するスペイン「国民」としての「国民意識」が最も必要とされたのではないかと考えられる。近年のグラハムによる内戦期共和国研

究では、大衆動員の側面におけるスペイン共産党(PCE)の重要性が指摘されている<sup>13</sup>。特に、共産党が「国民の団結(Unión Nacional)」を盛んに呼びかけ、大衆を「国民」として統合しようとしていた事実は注目に値する。こうした共産党による国民統合路線という政治的背景を踏まえた上で、本稿ではポスタープロパガンダが共和国大衆の「国民意識」の形成に果たした役割という、従来のポスター研究にはなかった新たなテーマを論じてい

第1章では、内戦期の共和国政府による戦時体制構築と、諸勢力の大衆動員力について論じた上で、共産党による国民統合路線を検討する。第2章では内戦ポスターの生産過程や様式などを概観する。第3章においては「特定」の対象、目的を意図したポスターを具体的に概観した後、「国民意識」の形成を目的としたポスターについて考察し、共産党による国民統合路線との関係を明らかにしたい。

## 1. 共和国政府における戦時体制構築と国民統合

### (1) 戦時体制構築と大衆動員

1936年7月17日、スペイン植民地モロッコにて勃発したクーデタは、フランコ将軍ら軍部に率いられ本土を二分する内戦に拡大する<sup>14</sup>。共和国政府は一時的に麻痺状態に陥り、アナルコサンディカリストの全国労働連合(CNT)と社会党傘下の労働組合である(UGT)の二大労働組合を中心に、民兵の組織化や農業の集産化、企業の自主管理化など、反乱軍に対する抵抗と同時に社会革命が遂行された。

事態が進行するにつれ、強力な戦時国家体制の構築が不可欠となった。1936年9月4日、社会党(PSOE)左派のラルゴ・カバリェロが新政府を樹立する。人民戦線諸党派、労働者勢力を結集したラルゴ新政府は、民兵の人民軍への統合、都市の中産階級や中小農民の保護など、社会革命をある程度承認しつつも軍事・政治・経済・社会などあらゆる面での中央集権化を進めた。1937年5月に成立したネグリン政府は長期的な防衛能力を確立しようとし、社会革命を抑制しつつより強力な中央集権化を推進した<sup>15</sup>。軍事改革を徹底し、また裁判制度や警察制度も整備することで戦況悪化に伴う士気の低下に対処した。さらに政治警察として軍事調査機関(SIM)が創設されスパイの摘発が強化された。また地方に対する中央統制も徹底され、CNTがヘゲモニーを握り独立的に行動していたアラゴン評議会が解散させられ、自治政府ジェネラリタートを有するカタルーニャも自治権の縮小を余儀なくされた<sup>16</sup>。

こうした共和国政府による中央集権化と戦時体制強化の中核となったのが、スペイン共産党であった。共産党はもともと少数勢力であったが、内戦の進行とともに急速に勢力を拡大し、政府内の政治的発言力を強めたのである。その理由としては、ソヴィエトによる武器援助、軍事顧問団やコミンテルン派遣員の存在を利用して軍における地位を上昇させたことが定説の一つであった<sup>17</sup>。確かにソ連の権威や軍への影響力といった要素は無視できないが、戦時体制を緊急、強力に構築していく上で、共産党の大衆動員力が最も有効であったということに注目せねばならない。

共産党は内戦開始の7月の時点ではおよそ40000人の党員であったが<sup>18</sup>、1937年3月には249140人、1937年6月には301000人と急速に党員数を拡大した<sup>19</sup>。中でも都市や農村の中産階級が共産党の穏健な路線に引き寄せられ、農業・商業・専門職別の組合、

さらに銃後で活動する様々な社会・福祉機関など広範な人民戦線組織に統合された。共産党の政策は、内戦によって解放された社会的・経済的な急進主義に対して、自由主義的な財産や価値観を保障してくれるものであった。それと同時に、戦争勝利の成果として社会・経済改革を約束することで、労働者階級の支持を得ることができた<sup>20</sup>。特に共産党が動員に成功したのは中産階級や労働者階級のうちまだ動員されていない、新しい支持層であった。中でも統一社会主義青年同盟(JSU)やその提携組織を通して、青年層を大規模動員できたことは注目に値する<sup>21</sup>。さらに共産党の支持基盤拡大の理由としては他勢力が相対的に弱体であったことも大きい。共産党は、共和左派の政治的失墜によって中産階級層を吸収することができた。また社会党の分裂に乗じて、UGT内にも浸透し始め、JSUへの支配力も強化していった。

こうした共産党の階級間団結というべき性格は、「新しい型の民主主義」と呼ばれる党の革命理論の中にも見ることができる。共産党は内戦の性格を反動的な資本家、大土地所有、教会、軍部によるファシスト反乱のみならず、ドイツ・イタリアによる侵略戦争とみなした。こうした性格を備えた内戦下で遂行すべき革命は民主主義革命であり、工業労働者、農業労働者、農民、都市中産階級、知識人など、全ての反ファシズム勢力の参加が必要とされる。様々な階級間の団結、そして議会制に基づく人民戦線の強化が必要であると考えられた<sup>22</sup>。

一方、共和国陣営における他の諸勢力は、広範な支持基盤を獲得し十分な大衆動員を実現することができなかった。共和左派は1930年代初頭の第二共和政初期において、スペインに内在する地域的不均衡に対応できずに経済・社会改革に失敗し、内戦開始までに労働者と中産階級双方の支持を得ることができなかった<sup>23</sup>。社会党も左派と中央派の党内分裂が深刻化し、統一的な大衆動員が不可能であった<sup>24</sup>。また100万以上の会員を有し、クーデタ勃発とともに社会革命を遂行したCNT、UGTの二大労働組合も、政治的戦略が未熟、かつ上意下達や地方組織間の連結が未成熟であるという構造上の欠陥を持っており、共和国全域を通じて戦争努力を結集させるには限界があった<sup>25</sup>。それに対し、共産党の一枚岩的で強力な組織力と規律、均衡政策、慎重なプロパガンダ戦略、そしてなによりも階級間団結という人民主義的な方針は、他の諸勢力の欠陥を相対的に克服し、多様な社会集団の一斉動員を可能にしたのである<sup>26</sup>。

以上のように、共産党による人民主義戦略に基づいた広範な大衆動員は、戦時体制の構築に不可欠でありかつ戦争勝利の前提であった。共産党がネグリン政府内で主導権を握れたのも、ソ連の物資援助のパイプとなっていたということだけではなく、こうした幅広い社会集団を共産党自体に、あるいは広範な人民戦線組織に組み入れることによって、国家に結合させることができたからであった<sup>27</sup>。こうした政治的背景を踏まえた上で、次節では共産党による国民統合路線について具体的に検討していこう。

## (2) 国民統合とスペイン共産党

ネグリン政権下で主導権を握ったスペイン共産党は、1937年以降戦況の悪化とともに、内戦をドイツやイタリアの侵略に対する「独立戦争」という性格に転化し、「祖国の防衛」のために全スペイン人が結束するよう訴えかけるようになった。1937年3月21日、マドリッドにおいてスペイン共産党書記長ホセ・ディアスは次のように演説している。

「7月18日、ファシズムは共産主義者、社会主義者、共和主義者、アナーキストに対して反乱を起こした。すなわちスペイン人民が合法的に取り戻した体制に対して反乱を起こしたのである。7月18日に、我々がイデオロギーの違いに関係なく、外国のファシズムによって侵略された我々の祖国のために団結して戦っているならば、我々は今日、そのとき以上に団結し続け、我々の戦争において一つの旗、すなわち人民戦線の旗以外のものはなくなるよう、あらゆる階級間の不信を終わらせなければならない。侵略者に対する全ての反ファシズム勢力よ！我々の祖国の防衛戦争において外国勢力に立ち向かう全てのスペイン人民よ！<sup>28)</sup>」

このようにホセ・ディアスは演説や党新聞の記事において「祖国(patria)」、「独立(independencia)」、「侵略者(invasor)」、「人民(pueblo)」といった言葉を繰り返すようになり、盛んに階級間の団結、反ファシズム勢力の結集、全スペイン人の結束を呼びかけた。

戦況の急速な悪化にともなって、ネグリン政権下では戦時国家体制の強化、中央集権化が急がれ、総力戦のための広範な大衆動員が必要とされた。前節で述べたように、特に共産党は大衆動員の重要性を十分に認識していた。広範な大衆動員を強化、拡大するには、共和国側の様々な社会集団に「国民意識」を持たせ、「祖国」のために一致団結させねばならない。共産党が演説や新聞等で盛んに使用した「独立戦争」「祖国の防衛」といった言葉は、こうした国民統合の必要性、重要性を反映しているものといえよう。さらに1938年以降、共産党は「国民の団結(Unión Nacional)」を盛んに呼びかけるようになった。

また「国民」という概念の範囲も拡大していくことになる。1938年11月29日、バルセロナにおいてホセ・ディアスは次のように述べている。

『「国民の団結」について語る時、我々の視線は、我々の領土内で侵略者の侵攻を妨げるために団結すべき人々のみならず、特に塹壕の向こう側の人々にも向けられる。『国民の団結』の強化と拡大は、外国勢力に立ち向かう全スペイン人の国民意識の再生と一致する。そしてこの国民意識とは我々全員にとっての利害について理解することである<sup>29)</sup>』

つまり「国民」の範囲は共和国の枠を超え、ドイツやイタリアによるスペインの半植民地化を望まない、フランコ側の保守層、カトリックにまで拡大したのである。国際情勢が変化するまで絶望的な戦況を耐え抜くには、イデオロギーや階級・職業、さらに共和国側・反乱軍側の境界を超えて、外国勢力の支配を望まない全スペイン人を「国民」として統合し、総力戦に動員することが必要とされたのである。

政府や共産党は様々なプロパガンダメディアを通して、人々に国民的結束を呼びかけた。共産党機関紙ムンド・オブレロは次のような見出しを付けた、「侵略者に対する全スペイン人の統合を！<sup>30)</sup>」、「ドイツ人やイタリア人を我々の国から追放せよ<sup>31)</sup>」。

このように共産党を中心とする政府の国民統合路線に従い、新聞や定期刊行物など様々なメディアによって「国民意識」の発揚が訴えかけられた。ポスターもまた重要なプロパガンダメディアの一つとして、同様の役割を担ったと推測できよう。次章以降で

はポスタープロパガンダの考察を展開する。

## 2. ポスタープロパガンダの生産と美的様式

「国民意識」形成とポスタープロパガンダの関係について検討する前に、共和国陣営におけるポスタープロパガンダを総合的、立体的に捉えるために、まず本章ではポスターの生産過程や様式を扱い、メディアとしてのポスターの成立を明らかにしたい。

### (1) 内戦ポスターの生産過程

「軍事反乱の勃発から8日も経たないうちに、すでに街の壁という壁は色とりどりの宣伝広告で包まれていた」。これはスペイン内戦における最も優れたポスターデザイナー、レナウの言葉である<sup>32</sup>。軍事反乱の勃発直後、共和国側の街中至る所に大量のポスターが貼られ、街全体の光景を一変させてしまった。

内戦の勃発は革命の開始でもあった。革命の高揚感が生み出す自発性、即興性が日常生活のあらゆる領域に浸透し、ポスターも自発的に、自然発生的に制作され発行された。すなわち、内戦の初期においてはデザイナーやリトグラフ工房は特別な制作依頼もなしに、自分たちで自由にポスターを生産していたのである。そのためポスターのテーマも革命的要素が強く、戦争遂行のための統制、規律、動員といった特定のテーマが現れてくるのは、政府や政党などのプロパガンダ機関がデザイナーや工房に直接依頼するようになってからであった<sup>33</sup>。

政府がプロパガンダの統制に乗り出すのは、1936年9月4日にラルゴ・カバリェロ政府が誕生してからである。ラルゴ政府は公共教育省を再編し、共産党員ヘスス・エルナンデスが大臣に任命された。エルナンデスのリーダーシップの下、公共教育省は大量のポスターを制作、発行することになる。1936年11月4日にはプロパガンダ省が設置され、ネグリン政権の下では外務省配属のプロパガンダ副事務局(Subsecretaría de Propaganda)がその役割を引き継いだ。しかし政府の公式機関とは別に、政党や労働組合、諸組織が独自にポスターを依頼、発行しており、またデザイナー組合や工房は自発的なポスター生産を続けていたため、ポスター生産の中央集権化が強化され始めるのは1938年初めになってからであった<sup>34</sup>。一方、政府による中央集権化はイメージやスローガンの画一化を生んだ。スローガンは厳格に検閲・統制され、同じ言葉の反復に陥ってしまった。またポスターは比較的高価な表現メディアであったために、1938年以後戦況の悪化とともに予算が窮乏してくると、必然的に紙・インクが不足し生産が困難になった。

以上のように、内戦前半に顕著であったポスター生産の自発性、分散化はポスターの高い芸術性や大量生産を実現した。しかし、内戦後半における戦況の悪化と中央集権化はポスターの質・量の両面における大幅な低下を招いてしまったのである。このようにスペイン内戦下の共和国陣営では、生産の中央統制よりもむしろ自発性と分散化がプロパガンダポスターの大量生産を可能にしていたのである。

ポスターの生産過程は主に三段階に分かれていた。まず政府や政党のプロパガンダ機関、労働組合など、いわゆるスポンサーが資金を用意し、ポスターデザイナー組合に作成を依頼する。さらにデザイナーは完成した下絵を美術工房に渡し、そこで大量にリトグラフ印刷されるのであった。また全てのポスターデザイナーが組合に編入されたわけ

ではなく、美術工房で個人的に活動する者も多かった<sup>35</sup>。それゆえ、スポンサー→デザイナー組合→美術工房という三段階の他、スポンサー→美術工房という回路も多く存在した。また、スポンサーによって特定の回路が設定されていたわけではなかった。デザイナー組合は大規模なもので八つ存在し、美術工房はマドリッド、バレンシア、バルセロナを中心に全国各地に多数存在した。スポンサーは適宜異なるデザイナー組合や美術工房に制作を依頼し、デザイナー組合も様々な美術工房に印刷を依頼したため、結果的に無数の回路が存在することになった<sup>36</sup>。このようにポスターの生産過程は特に統制されなかったといえる。これは内戦の勃発とともに、国家機構が一時的に解体・麻痺してしまったことを反映している。生産過程の分散的、無秩序な傾向は、政党や労働組合、その他多数の諸組織が独自の判断で一刻も早く戦争に対応しようとした、あるいは革命を遂行しようとしたことから必然的に生じたものであろう。

前述したように、ポスターの依頼、制作、印刷に関わった組織は様々である。中央政府は前述したプロパガンダ省やプロパガンダ副事務局、公共教育省の他、農業省など各省がポスターを発行している。その他では、特にマドリッド防衛評議会が大量のポスターを発行したことで知られている。自治政府ジェネラリタートが存在したカタルーニャでは、プロパガンダの分野においても自治権が行使され、1936年10月にプロパガンダ委員会が設置された。

政府の公式機関とは別に、政党もそれぞれ独自の機関からポスターを発行した。中でもソヴィエトやコミンテルンの支援を受けたスペイン共産党、および共産党系諸組織は重要である。ソヴィエトがスペイン内戦のプロパガンダ活動にかけた予算は共和国政府のそれを凌いでいた。そのため共産党は良質の紙を常に用意でき、戦争後半の紙不足にもほとんど影響を受けずポスターを大量発行できた。またソヴィエトのプロパガンダ芸術の影響を受けた、優秀なポスターデザイナーを多数有していた。それゆえスペイン共産党、共産党傘下の諸組織は、ポスター生産において、質・量の両面で他の政党、諸組織を圧倒的に凌駕したのだった<sup>37</sup>。JSUや第五連隊(Quinto Regimiento)、ソヴィエト連邦同胞協会(AUS: Asociación de Amigos de la Unión Soviética)、反ファシスト知識人連盟(AIA: Alianza de Intelectuales Antifascistas)、国際赤色援助(SRI: Socorro Rojo Internacional)、SRE スペイン赤色援助(SRE: Socorro Rojo de España)など多くの共産党系諸組織がプロパガンダ活動を推進し、ポスターを大量生産・撒布できる全国的なネットワークを形成した<sup>38</sup>。さらに共産党は政府内での発言力増大を反映して、プロパガンダ省やプロパガンダ副事務局、マドリッド防衛評議会のプロパガンダ局など、政府の公式プロパガンダ機関も統制下に置くようになる。

代表的なポスターデザイナー組合は、バルセロナの職業デザイナー組合(SDP: Sindicat de Dibujants Professionals)とマドリッドの美術職業組合(SPBA: Sindicato de Profesionales de las Bellas Artes)である。SDPはフォンセラやマルティ・バスなど内戦期の代表的なポスターデザイナーを擁し、1800人近くの会員を有する大規模な組織であった<sup>39</sup>。カタルーニャ自治政府のプロパガンダ委員会を中心に、UGT、CNT、JSUなど様々なスポンサーからポスターデザインの依頼を受け、カタルーニャの多数のリトグラフ工房に印刷を請け負わせていた。SPBAは1936年秋にUGTと共産党の保護の下結成された。SPBAは共産党やUGT、公共教育省、国際義勇軍などの依頼を受けたほか、特にマドリッド防

衛評議会と密接な関係を持ち、マドリッド防衛をテーマにした大量のポスターをデザインし、多数のリトグラフ工房に印刷させた。このようにSDPとSPBA両組合はスペイン内戦におけるポスターデザインの中心的な役割を担った<sup>40</sup>。

以上のように、共和国陣営のポスター生産の特徴はその分散性、要するに政府の公式機関に限らず、政党や労働組合、その他の諸組織などあらゆる勢力がポスターを独自に生産していたという状況にあった。

## (2) 内戦ポスターの美的様式

共和国陣営の内戦ポスターには、戦争や革命の本質を描こうとする姿勢、すなわちリアリズムが支配的であった。45パーセントという高度な文盲率を考慮すると、テキストよりもイメージを優先させる必要があり、さらにそれは大衆が即座に理解できるようなイメージでなければならなかった。美的様式の面では写実主義や表現主義、さらには商業ポスターでよく使用されたダダイズムやポストキュービズム、構成主義やシュールレアリズムなどあらゆる要素が共存し、一つのポスターの中に自然に、大衆が理解できる形で組み合わせられていた。こうした不均質な美的折衷主義が共和国陣営の内戦ポスターに共通する特徴であった<sup>41</sup>。

折衷主義が生じた要因の一つは、各ポスターデザイナーの本来の職業の多様性である。軍事反乱が勃発すると、職業の異なる多くの人々がデザイナーとして集められた。例えば、シュールレアリズムの手法で個性的なポスターを描いたブジョルは政治風刺画家出身であり、レナウと並んで内戦期の最も優れたデザイナーであったバルダサノは画家出身であった。こうした異なる職業的特性を持った人々の混在は、美的様式に統一基準を設定することを困難にした。またこうしたベテランばかりでなく、美術学校の生徒など多数のボランティアやアマチュアデザイナーが組合や工房でのポスター作成に関与し、大量生産に貢献した。

またこうした折衷主義を象徴する出来事が、1937年、文学雑誌「オラ・デ・エスパーニャ(*Hora de España*)」誌上で展開された、プロパガンダポスターの機能・様式をめぐる、レナウと画家ガヤの論争である<sup>42</sup>。画家であったガヤはポスターの本質を絵画的手法に従属するものと捉え、ゴヤやドラクロワの絵画のようにデザイナーは自身の主観や個性を最優先して現実を描き出すべきであると主張した<sup>43</sup>。これに対し、レナウは「ポスターデザイナーは規律ある自由、すなわち個人的意思の外部のある客観的な要求に左右される自由をもった芸術家である」と反論している<sup>44</sup>。早急に戦時体制を構築し、大衆動員を実現しなければならない戦況にあって、大衆の意識にいかにも有効に訴えかけるか、そのためにどのようなデザインが効果的なのかという機能性・有効性が最優先なのであり、デザイナーの感情にまかせた自発的、自由な活動は犠牲にされるべきであった<sup>45</sup>。

この二人のデザイナーの対立は、共和国側のポスターデザイナー全体の理論的分裂を象徴するものであった。実際、当時のスペインのポスターデザイナーの間では、ゴヤ的な表現手法、すなわち絵画的価値を優先させ自身の感情・感性のままに描く傾向が主流であった。内戦初期の自発的、自然発生的なポスターを特徴付けていたのも、革命の希望と情熱にあふれた感情的な表現であった。それゆえ、デザイナーの感情や感性、自発性をプロパガンダの目的に従属するものとみなすレナウの主張は、当時の多くのポスタ



ーデザイナーにとって革新的かつ非常に重要な理論的・方法論的基盤となったのである<sup>46</sup>。

### 3. ポスタープロパガンダの役割

本章ではまず「特定の目的」に「特定の対象」を動員するためのポスターについて具体的に検討した上で、より広範な大衆に訴えかける、「国民意識」形成の役割を担ったポスタープロパガンダを考察し、共産党の国民統合路線との関係を明らかにする。

#### (1) 「特定」の対象、目的を意図したポスター

前線の動員を目的としたポスターは、必然的に軍事問題がテーマとなり、民兵や正規軍の兵士といった戦闘員を対象とする。前章で論じてきたように、内戦初期において革命の熱狂はポスターの自然発生的、自発的な大量生産を実現した。それゆえポスターのテーマも「まず革命を遂行し、その後戦争に勝利する」という色彩が強く、軍事ポスターにおいては民兵のイメージが多用された。公共教育省の再編、プロパガンダ省が設立され、ようやくプロパガンダの統制が始まると、戦時体制構築、中央集権化を目的とした政策を反映するポスターが生産されるようになる。

政府や政党、特にスペイン共産党による軍事ポスターでは「まず戦争に勝利する」「単一統率(mando único)」「人民軍」「規律」をテーマにしたポスターが主に作成されるようになった。これには民兵を正規の人民軍に統合し、規律ある強力な軍隊を創り出そうとする政府の軍事政策が反映されている。そのため政府や共産党の軍事ポスターは革命を優先させるようなイメージを徹底的に排除し、民兵に向けたポスターも作成されなかった<sup>47</sup>。正規軍の兵士のイメージは、規律化された軍隊のイメージである制服やヘルメット、軍の伝統的な階層性を象徴する敬礼といった特徴で統制され、また軍事隊列の統率をイメージして、兵士が集合的に描かれるようになった。さらに兵士の体や銃剣は、幾何学的な線によって描かれ、感情のこもった表現主義的な要素は縮小されていった。このような兵士のイメージの非人間化、匿名化は、軍隊内の統率や規律を徹底させるために有効な手法だったのである【図1】<sup>48</sup>。

一方、CNTなどアナーキストのポスターで使用されるイメージは、上記の政府や共産党の軍事ポスターとは明らかに対照的であった。アナーキスト民兵隊においては、あらゆる権威を否定するアナーキズムの教義に基づいて、伝統的な軍隊の階級制度や規律といったものが否定され、民兵間の平等や個人の自由が称揚された<sup>49</sup>。そのため、ポスターのイメージにおいても、行進や敬礼、ヘルメットや制服といった、政府や共産党の軍事ポスターに共通していた軍事的要素の大半が排除され、敵を前に一人で立ち向かう強壯で筋肉質な人間が描かれた【図2】<sup>50</sup>。

次に銃後の動員を目的としたポスターは、戦闘員を除いた共和国陣営の人々全てに向けられたものである。特に主要なテーマとなったのが「労働と生産」である。銃後は労働の前線と位置づけられ、軍事前線を支え、戦争に勝利するための労働と生産が奨励された。これは内戦の長期化に伴い戦時体制の構築が不可欠となると、経済的な国家統制が強化されていくことを反映している。こうした政治状況を背景に、農工業の生産と労働を奨励するポスター、農産物の都市への流通や前線への供給に対する統制を描いたポ

スターが多数作成された。

「都市の防衛」をテーマとしたポスターも多数作成された。中でもマドリード防衛を扱ったポスターが代表的である。マドリード防衛のポスターには、全市民の努力を結集し、長期間の抵抗を維持するために必要な、様々なプロパガンダが用いられた。市民の士気を鼓舞するため「奴らを通すな(no pasaran)」の有名なスローガンが多用されたほか、それとは逆に妊娠した女性、子供、老人などを「避難」させるためのポスターも作成された。また、「裏切り者」「デマ」「スパイ」「富の独占者」「第五列(反乱分子)」を警戒、告発するよう市民を結束させるポスターも多数作成された【図3】<sup>51</sup>。このようにマドリード防衛においては、市民は反乱軍の侵入に対する抵抗のみならず、内部の浄化にも動員された。

共和国側の総力戦体制を反映して、女性の動員を促すポスターも多数作成された。戦争の長期化、国家体制の再建に伴い、労働や生産への動員を強調する「勤労女性」としてのイメージが描かれ、女性は銃後において前線の勝利を支えるためのあらゆる活動に動員された。ポスターの中の女性像は、こうした様々な役割に応じて使い分けられた。例えば女性の労働や生産を奨励するポスターにおいては男性的で筋肉質なイメージの女性が描かれるようになる一方で、マドリード防衛の際の「避難」のポスターに代表されるように、子供を抱いた「母親としての女性」、爆撃などの「犠牲者としての女性」も描かれた<sup>52</sup>。女性同様、子供もポスターのイメージに登場した。保護や疎開奨励のポスターのほか、子供は戦争の犠牲者として頻繁に描かれ、反フランコ、反ファシズムプロパガンダとなった。例えば、公共教育省によって作成された【図4】のフォトモンタージュは爆撃で死亡した子供の写真を用いることで、国内のみならず国際世論にファシズムの脅威を訴えかけるものであった<sup>53</sup>。

今まで検討してきたポスターは、「特定」の政策に、「特定」の対象を動員することを目的として作成されたものである。しかしそれだけではなく兵士、労働者、農民、都市の中産階級、女性など職業や階級、ジェンダー、年齢の差を超えた広範な対象に、反フランコや反ファシズム、さらにスペイン「国民」としての意識といった、共通意識、連帯意識を発揚することも、プロパガンダの重要な機能といえよう。共和国側の人間がそうした共通意識、連帯意識を発揚することによって初めて、具体的なプロパガンダが効果を発揮し、共和国政府は大衆動員を円滑に行い、戦時体制を構築することができるのである。次節では「特定」の政策や目的を超えた、より広範な対象に向けたポスター、すなわち「国民意識」の形成を意図したポスターについて検討する。

## (2) 「国民意識」の形成とポスタープロパガンダ

ドイツやイタリアが、反乱軍を支援してスペイン内戦に直接介入したことは、内戦の国際化という事態を招いた。その結果反乱軍はファシズムと同一視され、反ファシズムのイメージを前面に出したポスターが大量に作成されるようになった。このようなポスターにはファシズムの象徴である鉤十字、蛇、獣の爪、芋虫、死神などに立ち向かう兵士や労働者、また犠牲となる人々の姿が描かれた。また前述したように無抵抗な女性や子供が爆撃の犠牲者として描かれ、さらにリアルな恐怖感、悲惨さを表現するためにフォトモンタージュが効果的に使用された。こうした反ファシズムポスターは特定の階級、

職業を対象としているのではなく、共和国側の全ての人々に反ファシズム戦線の結束を訴えるものであった。例えば、プロパガンダ省によって依頼され、モラレスの描いたポスター「国民軍(Los Nacionales)」は反フランコ、反ファシズムのイメージを描いたものとして有名である【図5】。図の中心には軍事反乱を支持したカトリック教会の司教、その左には青い肩帯にファシズムの紋章であるファスケスを付けた軍人、すなわちイタリア軍のイメージが描かれている。イタリア軍人の右にはモロッコ軍を象徴する北アフリカのムーア人が2人描かれる。ポスターの右側にはスーツの襟に鉤十字の記章を付けた資本家、すなわちナチスドイツの象徴が描かれている。さらに船の上部では、スペインの地図が絞首台に吊るされており、その脇に反乱軍のスローガンであった「スペインよ立ち上がれ(Arriba España)」の文字が描かれている。そして図の最上部、絞首台の上にフランコを象徴する鷲がとまっている。このように「国民軍(Los Nacionales)」のポスターでは、反乱軍とそれに加勢する国内勢力、外国勢力のイメージが凝縮されている。そして絞首台に吊るされているスペインの地図が示すように、スペイン内戦は国内的な性格を超え、ファシズム勢力による侵略戦争のイメージで描かれたのである<sup>54</sup>。さらに明確に「侵略者(invasor)」「独立(independencia)」「祖国(patria)」「人民(pueblo)」「スペイン人(españoles)」などの文字を刻み、スペインの国土のイメージを組み合わせることによって、「侵略戦争」「独立戦争」を強調するポスターが多数作成された。

「祖国」や「独立」の言葉を記したポスターの中には、同時に「1808」「5月2日」と記されたものも散見される。「1808」というのは1808年、そしてその「5月2日」とはナポレオンのスペイン侵入に対してマドリッド民衆が蜂起した日、いわゆる「スペイン独立戦争」が開始された日とされている。つまり「1808」「5月2日」と記されたポスターは、外国勢力の支援を受けたフランコ軍をナポレオン率いるフランス軍と同一視し、「スペイン独立戦争」のイメージを喚起するために作成されたと考えられよう。

「スペイン独立戦争」(1808-1814)とはスペインへのナポレオン軍の侵入に対し、スペイン人がゲリラ戦の展開やイギリス軍の支援によって抵抗し、最終的にフランス軍を撃退して「祖国の独立」を防衛したものと理解される。しかし実際、この戦争は「独立戦争」という名称に単純化できない、国際戦争や内戦としての側面など複雑な性格を内包していた<sup>55</sup>。また対フランス戦争に臨む人々の意識は社会階層に応じて、また地域によって異なっており、「スペイン国民意識」の発揚として総括できるものではなかったのである<sup>56</sup>。しかし、戦後の国民国家形成の流れの中で、次第に「スペイン独立戦争」と「5月2日」は、スペイン国民が「祖国の解放と独立」のために一致団結して戦ったという、創り出された「神話」のシンボルとなった。そしてこの「神話」は近代的な自由主義国家、国民国家を建設するための基盤となる「国民意識」の形成に利用されたのである<sup>57</sup>。

そしてスペイン内戦期の共和国側において、ゴヤが「国民的画家」として頻繁に引き合いに出されるようになる<sup>58</sup>。対フランス戦争当時、スペイン・ブルボン家の宮廷画家であったゴヤは、戦争が引き起こす飢えや混乱、不幸、恐怖、悲惨さを冷徹なりアリズムで描き出し、戦争を非難した。その作品の要素はスペイン内戦のポスターにも取り入れられることになる。ゴヤの代表的作品『5月2日』『5月3日』、そして『戦争の惨禍』の場面を彷彿させるイメージが描かれ、あるいは作品がそのまま複製されてポスターに

組み込まれた。例えば、バルダサノのポスター【図 6】では、小刀を持ってナポレオン軍に立ち向かうマドリッドの愛国者の姿と、ファシズムに立ち向かう共和国兵士の姿が重ねられている<sup>59</sup>。共産党系組織(SRE)によって作成されたポスター【図 7】には、「1808」「1938」「独立(Independencia)」の文字とともに、『5月2日』などゴヤの絵画の複製と、内戦下の兵士、農民、女性、老人の写真が対比されている。このように、バルダサノらデザイナーはポスターの中に「独立」「1808」「5月2日」といった文字とゴヤの作品のイメージ、複製を組み合わすことによって、「スペイン独立戦争」の「神話」を視覚化し、スペイン内戦のイメージと同化させようとしたと考えられる<sup>60</sup>。こうしたポスターは、外国勢力に支援された反乱軍をナポレオン軍と同化させ、内戦を「スペイン独立戦争」の再来としての「独立戦争」「国民的戦争」のイメージに変形させることによって、共和国側の人々の「国民意識」を覚醒させる機能を持ったと考えられる<sup>61</sup>。

このような「スペイン独立戦争」を表象するポスターに限らず、「侵略戦争」「独立戦争」のイメージを喚起するポスターにおいては、「労働者」「農民」「民兵」や「人民軍」といった特定の単語、イメージは前面に出されず、代わりに「独立」「祖国」「スペイン人民」といった愛国的な単語や、「平和」や「幸福」といった普遍的な単語、スペインの国土のイメージなどが中心となった【図 8】【図 9】<sup>62</sup>。つまり、こうしたポスターは共和国を支持し、反乱軍に抵抗するあらゆる階級や職業の人々に、利害対立を超えた同胞としての共通意識や連帯意識、すなわち共和国に帰属しているという「国民意識」を持たせる役割を担っていたと考えられよう。

この点で、特に共産党、共産党系組織がこうしたポスターを多数作成していたという事実が注目される<sup>63</sup>。共産党や共産党系諸組織はポスターを大量生産・撒布できる全国的なネットワークを形成していたことも先に述べた。このことから「国民意識」の形成を目的としたポスタープロパガンダは、一章で述べた新聞等のメディアと同様、共産党による国民統合路線という政治的文脈に位置づけることができるのである。

## おわりに

本稿では、スペイン内戦中の共和国陣営において作成されたポスター、中でも共和国大衆の「国民意識」形成に効果があったと考えられるポスターに注目した。こうしたポスターではフランコ側に加担したイタリアやドイツが侵略者として描かれ、さらに「独立」「祖国」「スペイン人民」といった愛国的な単語や、スペイン国土の地図が描かれることで、「侵略戦争」「独立戦争」や「国民的戦争」のイメージが強調された。「スペイン独立戦争」やゴヤの作品のイメージも効果的に利用された。こうしたポスターは階級や職業、ジェンダー、年齢を超えて、共和国を支持するあらゆる集団の意識に訴えかけ、国民意識形成の役割を果たしたといえる。

内戦の長期化、戦況の悪化にともない、共和国政府は政治的・経済的・軍事的中央集権化を推し進め、戦時国家体制を構築する必要に迫られた。そのためには広範な大衆動員が緊急の課題とされたのである。共和国陣営の諸勢力の中で、特にスペイン共産党は強力な党内規律、組織力、ソ連の威光、そして階級間団結を呼びかける人民主義的戦略に基づいた慎重なプロパガンダ活動によって中産階級と労働者双方から支持基盤を獲得し、広範な社会集団を国家に結合させることができた。1937年後半以後、政府内で主導

権を握った共産党は、内戦の性格をドイツやイタリアによる侵略戦争に転化し、「祖国の独立」のための階級間団結、全スペイン人の結束を訴えかけるようになった。さらに1938年以後は「国民の団結」を前面に押し出し、フランコ側の保守層やカトリックも「国民」として統合しようと試みた。

「祖国」「独立」「スペイン人民」といった言葉を織り交ぜたポスター、「スペイン独立戦争」やゴヤの作品をイメージしたポスターは、このような共産党による国民統合路線という政治的要請から作成されたものとみなすことができる。こうしたポスターは共和国政府による国民統合の装置の一つとして位置づけることができよう。

本稿では「国民」の概念、理論については詳述できず、不明確なまま議論を進めてしまった。「国民意識」が本論の主題の一つである以上、スペイン「国民」やスペイン・ナショナリズム自体をめぐる歴史的議論、研究史も十分に検討すべきであったろう。また本稿の主題であるポスター以外にも、ラジオや映画、出版など多様なプロパガンダメディアにも着目し、より包括的にプロパガンダメディアによる「国民意識」形成の役割について論じていくことも、今後の課題である。

#### 《註釈》

- <sup>1</sup> A. Pizarroso Quintero, "La propaganda, arma de guerra en España (1936-1939)", in A. Pizarroso Quintero (ed.), *Propaganda en guerra*, Salamanca, 2002, pp. 11-12.
- <sup>2</sup> H. Escolar, *La cultura durante la guerra civil*, Alhambra, 1987; J. M. Fernandez Soria, *Educación y cultura en la guerra civil (España 1936-1939)*, Valencia, 1984.
- <sup>3</sup> Pizarroso Quintero (ed.), *Propaganda en guerra*, Salamanca, 2002 では、視覚芸術、文学、活字出版、ラジオ、映画、写真など様々なプロパガンダメディアについて各研究者が論じている。参考文献も充実しており、各メディア研究の概観、近年の研究動向を知る上で参考になる。
- <sup>4</sup> C. Grimau, *El cartel republicano en la Guerra Civil*, Madrid, 1979.
- <sup>5</sup> C. Fontseré, "El sindicat de dibujantes profesionales", in J. Miratvilles, J. Termes and C. Fontseré, *Carteles de la Republica y de la Guerra Civil*, Barcelona, 1978.
- <sup>6</sup> F. Tomás, *Los carteles valencianos en la guerra civil española*, Valencia, 1986.
- <sup>7</sup> J. and A. Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, Barcelona, 1998, pp. 65-67; H. Escolar, *op. cit.*, p. 101.
- <sup>8</sup> Carulla, *op. cit.*
- <sup>9</sup> *Ibid.*, p. 12.
- <sup>10</sup> *Ibid.*, p. 18.
- <sup>11</sup> 現在ではおよそ1200種類以上のポスターを利用できる。Tomás, *op. cit.*, p. 44. 消失したものも含め、内戦中生産されたポスターの種類については、研究者によって推定数が大きく異なる。例えば、グリマウはおよそ1500枚、カルリャは3500枚近く、トマスは4000から5000枚と推定する。それぞれ以下を参照。Grimau, *op. cit.*, p. 15; Carulla, *op. cit.*, p. 49; Tomás, *op. cit.*, p. 44.
- <sup>12</sup> 例えばカルリャは、内戦期以外のものも含めた2000枚のポスターを、「規律」「生産の奨励」「衛生」「女性」「子供」「マドリッド防衛」「教育」「文化」など50のテーマに分類し、論じている。Carulla, *op. cit.*
- <sup>13</sup> 共産党の大衆動員力に関しては以下の論文を参照。H. Graham, "Community, Nation and State in Republican Spain 1931-1938", in C. Mar-Molinero and A. McElligott (eds.), *Nationalism and the Nation in the Iberian Peninsula*, Oxford, 1996; Idem, "War, Modernity and Reform: The Premiership of Juan Negrin", in P. Preston and A. MacKenzie (eds.), *The Republic Besieged. Civil War in Spain 1936-1939*, Edinburgh, 1996. また共産党含め他の左派勢力の動員力について扱った論文は、Idem, "Spain 1936. Resistance and Revolution: The Flaws in the Front", in T. Kirk and A. McElligott (eds.), *Opposing Fascism. Community, Authority and Resistance in Europe*, Cambridge, 1999. [以下同論文は"Spain

1936. Resistance and Revolution”と略す] 従来のスペイン共産党研究では、共産党はソ連やコミンテルンの影響力を背景に、軍への浸透などを通して勢力を拡大し、肅清や強引なプロパガンダ活動を通じて反対派を弱体化させ、その結果共和国内部の分裂が深まり敗北につながった、というネガティブな側面が強調されることが多かった。例えばボロテンの研究はその傾向にある。B. Bolloten, *The Spanish Civil War. Revolution and Counterrevolution*, Hemel Hempstead, 1991. こうした傾向に対し、グラハムは他勢力と比較した上で、共産党が高度な大衆動員力を有し、共和国の戦争遂行を支える唯一の勢力であったという側面を強調する。これについては第一章で詳述する。なお、ボロテンとグラハムの研究を比較した論文として、T. Rees, “Vision of the Vanquished: Recent Work on the Spanish Civil War”, *European History Quarterly*, 23, 1993.
- 14 スペイン内戦の通史は邦語でも多数読むことができる。以下ここで参照した邦語文献を挙げる。G. ジャクソン/斎藤孝監修・宮下嶺夫訳『図説スペイン内戦』(彩流社, 1986年); P. ヴィラール/立石博高・中塚次郎訳『スペイン内戦』(白水社, 1993年); H. トマス/都築忠七訳『スペイン市民戦争』(みすず書房, 1988年); 川成洋・渡部哲郎『新スペイン内戦史』(三省堂, 1986年)
- 15 H. Graham, “War, Modernity and Reform: The Premiership of Juan Negrin”, in P. Preston and A. MacKenzie (eds.), *The Republic Besieged. Civil War in Spain 1936-1939*, Edinburgh, 1996, p. 180. [以下同論文は“War, Modernity and Reform”と略す]
- 16 立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域—ナショナリズムの相克』(国際書院, 2002年) 47-49, 132-134頁。
- 17 しかし、実際共産党は部隊指揮官や政治委員(正規軍内の政治意識の監視, 政治教育に当たった)の地位を喧伝されているほど独占していなかった。共産党の勢力拡大の理由としてソ連やコミンテルンの介入, 軍への浸透といった問題を扱う際は慎重な検討を要する。中塚次郎「労働諸党派と内乱」[スペイン史学会編『スペイン内戦と国際政治』(彩流社, 1990年)]。
- 18 B. ボロテン/渡利三郎訳『スペイン革命—全歴史』(晶文社, 1991年) 155頁。(増補改訂版: B. Bolloten, *op. cit.*, p. 83.)
- 19 Graham, “War, Modernity and Reform”, p. 184. なお1937年3月段階の党員総数249140人の階級構成は、商工業労働者 87660人, 農業労働者 62250人, 農民すなわち小自作農や小作農が 76700人, 都市の中産階級 15485人, 知識人など 7045人である(拡大中央委員会総会での書記長報告)。数値だけ見れば共産党が中産階級, 労働者双方の支持を得ていたと判断される。中塚「労働諸党派と内乱」189-190頁。
- 20 Graham, “War, Modernity and Reform”, p. 185. こうした広範な動員の例として, 反ファシスト女性教会(AMA: Asociación de Mujeres Antifascistas)による女性の動員は代表的である。
- 21 JSU は社会主義青年同盟(FJS)と共産主義青年同盟(UJC)が1936年4月に統一して結成された組織である。JSU 結成当時は FJS の 50000 人に対して UJC は 3000 人ほどだったとされるが, 1936 年秋までにはほぼ完全に共産党の支配下となる。さらに JSU は, 内戦勃発直前は 150000 人, 1937 年 4 月には 300000 人に増加したとされる。ボロテン前掲書, 162-167 頁。(Bolloten, *op. cit.*, pp. 130-137); Graham, *The Republic at War 1936-1939*, Cambridge, 2002, pp. 75-76. [以下同著は *The Republic at War* と訳す]
- 22 中塚次郎「スペイン内戦における共産党の土地・農民政策」(『スペイン史研究』4, 1987年) 3-4 頁。また, J. Diaz, *Tres años de lucha*, Barcelona, 1978, vol. 2, pp. 140-143. これは当時の共産党書記長ホセ・ディアス(José Díaz)の演説等を集め編集した同時代文献である。
- 23 ヴィラールはスペイン内戦の原因として不均等発展の構造を分析している(ヴィラール前掲書, 10-40 頁)。また, Graham, *The Republic at War*, pp. 1-23. 共和左派失墜の過程については, Graham, “Spain 1936: Resistance and Revolution”, pp. 66-67.
- 24 こうした社会党の分裂と革命理論の変遷については以下の論文を参照。中塚次郎「スペイン社会党左派と人民戦線—革命理論の問題を中心にして」(『歴史学研究』528, 1984年所収); Graham, “The Eclipse of the Socialist the Socialist Left: 1934-1937”, in F. Lannon and P. Preston (eds.), *Elites and Power in Twentieth-Century Spain: Essay in Honour of Sir Raymond Carr*, Oxford, 1990.
- 25 CNT・UGT の構造的欠陥については次の論文を参照。Graham, “Spain 1936. Resistance and Revolution”, p. 72-75; S. Julia, “De la división orgánica al gobierno de unidad nacional”, in Fundación Pablo Iglesias, *Socialismo y guerra civil, Anales de Historia*, vol.2, Madrid, 1987, p. 237.
- 26 Graham, “Spain 1936. Resistance and Revolution”, pp. 78-79. しかし社会主義者は共産党の階級間

- 団結の方針を政治的日和見主義として非難した。Idem, "War, Modernity and Reform", pp. 186-187.
- <sup>27</sup> Idem, "War, Modernity and Reform", p. 184.
- <sup>28</sup> J. Diaz, *op. cit.*, vol. 2, p. 214.
- <sup>29</sup> *Ibid.*, vol. 3, p. 180.
- <sup>30</sup> *Mundo Obrero*, June 4, 1937. (J. W. Knudson, "The Ultimate Weapon: Propaganda and the Spanish Civil war", *Journalism History*, 15, 1988, p. 108. より引用)
- <sup>31</sup> *Mundo Obrero*, July 27, 1937. (Knudson, *loc. cit.* より引用)
- <sup>32</sup> J. Renau, "Función social del cartel Publicitario", *Nuevo Cultura*, no.9, 1937. 本稿ではレナウの雑誌記事等を編集した以下の文献を使用した。Idem, *Función social del cartel*, Valencia, 1976, pp. 66-67.
- <sup>33</sup> J. and A. Carulla, *op. cit.*, p. 41. 特にバルセロナの状況を記したものとして, C. Fontseré, *op. cit.*, p. 361.
- <sup>34</sup> Carulla, *loc. cit.*
- <sup>35</sup> ほぼ全ての美術工房が労働者によって集産化されていたという。ただし、各組合、工房によってポスターの美的様式が規定される、すなわちポスターの「集産化」が起きたわけではなく、デザイナーそれぞれの個性に従って描かれた。Carulla, *op. cit.*, p. 57.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, p. 49. 主要都市のデザイナー組合、美術工房のリストは同書巻末を参照。 *Ibid.*, pp. 624-625.
- <sup>37</sup> *Ibid.*, pp. 226-227.
- <sup>38</sup> Grimau, *op. cit.*, pp. 139-142.
- <sup>39</sup> *Ibid.*, p. 50.
- <sup>40</sup> *Ibid.*, p. 61; Carulla, *op. cit.*, p. 55. 共産党など特定の政党のためだけにポスターを作成する者もいれば、政治性に関係なく同時に複数の組織のポスターを作成する者もいた。同一組合内にこうした様々な特性をもつデザイナーが混在していたことは、しばしば組合内の対立を引き起こした。
- <sup>41</sup> Grimau, *op. cit.*, pp. 49-50.
- <sup>42</sup> *Hora de España* での両者の論争は, R. Gaya, "Carta de un pintor a un cartelista", *Hora de España*, no.1, 1937; J. Renau, "Contestación a Ramón Gaya", *Hora de España*, no.2, 1937 である。これは Renau, *Función social del cartel*, pp. 89-100 に全て所収されているので本稿ではそちらを用いる。
- <sup>43</sup> *Ibid.*, pp. 89-92.
- <sup>44</sup> *Ibid.*, pp. 94-95.
- <sup>45</sup> レナウとガヤの理論対立については以下の文献を参考にした。Grimau, *op. cit.*, pp. 61-65; F. Tomás, *op. cit.*, pp. 96-105; J. M. Fernandez Soria, *Educación y cultura en la guerra civil (España 1936-1939)*, Valencia, 1984, p. 160.
- <sup>46</sup> Grimau, *op. cit.*, pp. 65-66.
- <sup>47</sup> *Ibid.*, p. 132. スペイン共産党は内戦初期に、各政党の民兵を集め、強力な軍事規律で統合した第五連隊を結成した。第五連隊は、後に人民軍を組織する際のモデルとなる。また第五連隊のプロパガンダ機関によって大量に発行された軍事ポスターは、政府の公式機関から発行される軍事ポスターの模範的な美的モデルとなった【図1】。 *Ibid.*, p. 133.
- <sup>48</sup> *Ibid.*, pp. 142-144. こうした政府や共産党の軍事ポスターには、第一次世界大戦のポスターの影響がみられる。第一次世界大戦の記憶とプロパガンダについては、G. L.モッセ/宮武美知子訳『英霊：創られた世界大戦の記憶』（柏書房、2002年）。さらに共産党のポスターはロシア革命やロシア内戦のイメージも頻繁に利用した。Carulla, *op. cit.*, p. 17.
- <sup>49</sup> しかし、現実はこのような理想的教義とは一致しなかった。以前からアナーキスト勢力内部にはイデオロギー的分裂が存在していた。さらに内戦下において、CNT 指導部は一般的情勢への適応と教義の遵守との間で葛藤を示すことになる。特に規律問題をめぐって激しい論争がなされた。ボロテン前掲書、282-285頁。(Bolloten, *op. cit.*, pp. 260-265.)
- <sup>50</sup> Grimau, *op. cit.*, pp. 156-162.
- <sup>51</sup> プジョルの描いた「流言(El Rumor)」【図3】のポスターはシュールレアリズムの手法を使用し、共和国内部の異分子を描き出している。こうしたポスターの図像分析は、トマスの研究を参照。Tomás, *op. cit.*, pp. 54-55. こうした公的秩序、市民の安全性をテーマにしたポスターでは、現実を変形、歪曲させる表現主義的手法が有効であった。Grimau, *op. cit.*, p. 202.
- <sup>52</sup> *Ibid.*, pp. 206-219; Tomás, *op. cit.*, pp. 78-85.
- <sup>53</sup> 【図4】の反ファシズムポスターはスペイン語版と英語版、フランス語版が作成された。共和

国政府は国外のスペイン大使館の出版機関や、1937年のパリ万国博覧会など様々な展示会を通して、反ファシズムを訴えるポスターを国外に広めた。

- <sup>54</sup> 最終的に、イタリアは約70000人、ドイツはコンドル兵団の飛行士や技師を中心に約5000人の兵員を投入したとされている。さらに70000から80000のムーア人部隊、数千のポルトガル軍が反乱軍側に加勢した。一方、共和国側には約35000人の国際義勇軍、約2000人のソ連技術者・参謀将校が参戦していたとされている。ジャクソン前掲書180-182頁。(原書: Jackson, *op. cit.*, pp. 148-149.)
- <sup>55</sup> J. Alvarez Junco, “La invención de la Guerra de la Independencia”, *Studia historica-historia contemporánea*, vol.12, 1994, pp. 79-81; Idem, “El nacionalismo español como mito movilizador. Cuatro guerra”, in R. Cruz and M. P. Ledesma (eds.), *Cultura y movilización en la España contemporánea*, Madrid, 1997, pp. 37-38.
- <sup>56</sup> 立石博高「スペイン独立戦争と『国民意識』」(『一橋論叢』110-4, 1993年)613-621頁。および、同「『スペイン独立戦争』と歴史の創出」[立石博高・中塚次郎他共著編『スペインの歴史』(昭和堂, 1998年)]174-177頁。
- <sup>57</sup> 「スペイン独立戦争」の「神話化」の過程については、Idem, “La invención de la Guerra de la Independencia”, pp. 81-92. を参照。
- <sup>58</sup> Carulla, *loc. cit.* 例えばレナウは、「ゴヤの圧倒的な作品を見つめていると身震いがする。彼のイメージを介して、今日のように独立を防衛するために武器を持って立ち上がった民衆を引き裂く、過去の侵略者の野蛮さが再現されているからだ」と述べている [J. Renau, “Goya y nosotros. De nuevo, por nuestra independencia”, *Nuestra Bandera*, no.1-2, 1938. (M. A. Gamonal Torres, *Arte y política en la Guerra Civil española. El caso republicano*, Granada, 1987, pp. 248-251 より引用)].
- <sup>59</sup> Carulla, *op. cit.*, p. 80.
- <sup>60</sup> また、ゴヤの作品をイメージしたポスターは、美的価値からしても他と異質であった。共和国側の内戦ポスターは、第一次世界大戦、ロシア革命、ロシア内戦、社会主義リアリズムのポスターの影響を少なからず受けていた。しかし、スペイン独自のリアリズムの起源であるゴヤの作品を利用することによって、内戦ポスターは真にスペイン的、国民的な独自性を獲得することができたとされる。特にバルダサノはこうしたスペイン的独自性を持ったポスターを創造するよう要求した。Grimau, *op. cit.*, pp. 106-108, 146.
- <sup>61</sup> 共産党機関紙ムンド・オブレロは「スペイン独立戦争」の「神話」を呼び起こして次のように述べる。「ダオイスとベラルデ、ルイス中尉、マラサーニャの英雄的精神はマドリッドの塹壕の兵士に乗り移った。……サラゴサとヘローナを防衛したものは今日における我々の軍事指揮官たちの歴史的先行者である」*Mundo Obrero*, May 2, 1937. (Alvarez Junco, “La invención de la Guerra de la Independencia”, pp. 90-91. より引用)
- <sup>62</sup> 例えば、政府のプロパガンダ副事務局によって依頼されたポスター【図8】には「スペインは独立のために戦っている。そして平和と全人民の結束のために」と書かれている。副事務局に依頼されたレナウのフォトモンタージュ【図9】には、兵士、労働者、農民、女性の写真とともに「安楽のために、スペイン人民の幸福と自由のために、人民軍は戦う」と記されている。こうしたテーマのポスターについては、以下のポスター集を参照。Carulla, *op. cit.*, pp. 234-241, 509; J. Miratvilles, J. Termes and C. Fontseré, *Carteles de la Republica y de la Guerra Civil*, Barcelona, 1978, pp. 187-193, 328-341. [以下同文献は *Carteles de la Republica* と略す]
- <sup>63</sup> Grimau, *op. cit.*, p. 146; Tomás, *op. cit.*, p. 95. 共産党や共産党系組織がこうしたポスターを多数作成していた事実は、以下のポスター集からも確認できる。Carulla, *op. cit.*, pp. 234-241, 509; Miratvilles, Termes and Fontseré, *Carteles de la Republica*, pp. 187-193, 328-341.





(図1) 発行：第五連隊  
「第五連隊は勝利への道を指し示す」



(図2) 発行：CNT/ANT  
「1936年7月19日」

「流言」  
(図3) 発行：SRI

3.2.1.



「マドリード. これが反逆者の軍事行動だ」  
(図4) 発行：公共教育省





(図 5) 発行：プロパガンダ委員会 「国民軍」

(図 6) 発行：スペイン農業労働者連盟 (FETT: UGT 農業部門) 「侵略者よ出て行け！」

# INDEPENDENCIA HOJA MURAL DEL SOCORRO ROJO DE ESPAÑA

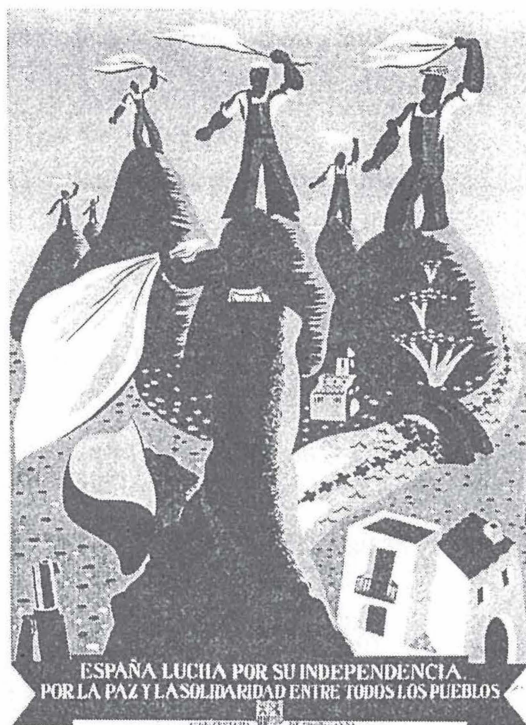
en 1808...





1.797 DARTELANO 1937 100 x 63  
N.C. BARCELONA VALENCIA 1937

(図 7) 発行：SRE  
「1808年、そして1938年における  
独立」



1.797 ANÓNIMO 1938 98 x 66  
N.C. BARCELONA OOR. SP

(図 8) 発行：プロパガンダ副事務局  
「スペインは独立のために戦っている。  
そして平和と全人民の結束のために」



1.798 RENAU 1937 100 x 70  
N.C. BARCELONA OOR SP

(図 9) 発行：プロパガンダ副事務局  
「安楽のために、スペイン人民の幸福  
と自由のために、人民軍は戦う」

## 《原題と出典》

図 1 : *El quinto cuerpo de ejercito marca el camino de la victoria*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.149.

図 2 : 19 julio 1936

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.158.

図 3 : *El Rumor*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.400.

図 4 : *Madrid. The "military" practice of the rebels. If you tolerate this, your children will be next.*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.379.

図 5 : *Los Nacionales*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.240.

図 6 : *¡Fuera el invasor!*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.95.

図 7 : *Independencia en 1808, en 1938*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.96.

図 8 : *España lucha por su independencia. Por la paz y la solidridad entre todos los pueblos*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.241.

図 9 : *Por el bienestar, la felicidad y libertad del pueblo español, lucha el ejercito popular*

出典 : Carulla, *La Guerra Civil en 2000 carteles*, p.509.

訂正)

50 頁【図 6】と 51 頁【図 7】の図版の順番が編集部側の手違いにより逆になっております。申し訳ございません。

(編集部)